

「ううっ……むふうう」

思わず美玲は色っぽい鼻息をもらした。お尻に当たる逞しい感触に、妖しい期待をせずにはいられない。

（あ……は、早く……）

はしたないと思いつつも、心のなかで淫らなおねだりをしてしまう。ずっと焦らされて、挿れてもらえなくて、もう身体がどうにかなってしまいたいそうだ。

胡桃の股間に顔を埋めて前屈みになっているので、ちょうどいい感じでヒップが後ろに突きだされている。美玲は泣きながらヒップを淫らにくねらせて、精いっぱい挿入をねだった。

「この淫乱が。そんなに欲しいのか？」

左の乳房をねつとりと揉みしだかれながら詰問されて、美玲はガクガクと何度もうなずいた。と、次の瞬間。

「ひぐッ！ あぐうッ！」

少女の恥裂に密着させた唇の隙間から、激痛と驚愕がミックスされた絶叫がほとばしる。巨大な肉亀が、膣ではなく肛門に突き立てられたのだ。

（やっ！ そ、そこ、違うっ、いやあッ）

亀頭の先端がアナルの皺を伸ばして、すでに数ミリ埋没している。

「なんのために浣腸したかわかるか？ ケツの穴でも感じるように調教してやるよ」
六年前に一目惚れした美少女と肛門で繋がる。そう考えただけで、裕也のペニスはいつもよりも硬く大きく張りつめていく。ヴァギナにつづいてアナルのヴァージンを奪うことで、美玲を完全に自分だけの肉奴隷に堕とすのだ。

「美玲の穴は全部俺のもんだ。誰にも使わせないぜ」

競泳水着に包まれたウエストをがっしりとつかみ直すと、目を血走らせて唇のまわりを舐めまわした。

（うわっ、やつ、痛いっ、む、無理よ……お、お願い、やめてえ……）

お尻の穴を犯される恐怖に、胡桃の膣に舌を挿しこんだまま総身を震わせて、心の中かで必死に許しを乞う。

しかし願っても虚しく水中で完全勃起したペニスをグイグイと押しつけられて、アナルは限界まで拡張されてしまう。そして裕也がゆっくりと腰を押しだすと、ミシミシと音をたてながら巨大な肉棒が体内に侵入してきた。

「おらおらっ、入ってくぜえ」

「あぐううッ！ ひッ、ひいッ、痛いッ！ 壊れちゃううッ」



身体を引き裂かれるような激痛に、頭を跳ねあげて大声で泣き叫ぶ。

「あんっ、美玲先輩？ ど、どうしたんですか？」

強い力で手を払いのけられた胡桃が目を見開いた。クンニの快楽に溺れていて、水中でなにが行なわれているのか気づいていないのだ。

「た、助けてっ、胡桃ちゃん助けてえっ！」

泣きながら後輩にすがりついて助けを求める姿は、あのプライドの高い藍ヶ浜のマーメイドではなく、一人のか弱い女子高生にすぎなかった。

牆壁を挟まれる快楽を期待していた美玲にとつて、アナルヴァージンを奪われる痛みはあまりにも強烈だ。その苦しむ姿が裕也の嗜虐癖をさらに刺激し、排泄器官は容赦なく犯されていく。

「おうっ。さすがにキツイな……おらっ！」

裕也のかけ声とともに、痛みがほんの少しだけ軽くなる。一番太いカリの部分が挿入されたのだ。そのままズルズルと長大なペニスを根元まで押しこまれて、言葉にならないか細い悲鳴が屋外プールに響き渡った。

「ふうっ、全部入った。ヌメヌメしてて気持ちいいぜえ、美玲のケツの穴」

亀頭と肉竿全体が生温かい直腸粘膜にねっとり包みこまれ、付け根は括約筋にギ

ユツと強烈に締めつけられる。裕也は根元まで挿入した状態で動きをとめて、膣とはまったく違う、腰骨がとろけてしまいそうな快感を堪能する。

「あうう……だ、ダメ、痛いの……お、お尻……お願い、もう許してえ」

肉棒を動かされなければ、痛みは我慢できる範囲にまで小さくなる。それでも肛門に極太ペニスを挿入されている汚辱感はずばかりで、美玲は胡桃の太腿に爪を立てて弱音を吐きつつける。

「せ、先輩い……やああ……」

胡桃は二人の会話から、美玲のお尻の穴にペニスが挿入されていることを知り青ざめた。大好きな美玲先輩を助けたいのだが、どうしたらいいのかわからない。

裕也はペニスに絡みついてくる襷の感触に惚けた顔をしながらも、オロオロしている胡桃に声をかけた。

「へへッ。美玲を助けないんなら、おまえの指でイカせてやりな」

「く、胡桃が……美玲先輩を……」

——美玲先輩をイカせる。

その一言で胡桃はあんなにも苦手だったプールに無心で飛びこんでいた。キャップをかぶり忘れて長い髪が濡れてしまったが、そんなことは気にならない。